

## ねがいのいえニュース 第52号

生活支援ハウスねがいのいえ広報紙・2018年10月15日発行

発行責任者：藤本真二 〒331-0071 さいたま市西区高木185-29

Tel (048) 626-1909 Fax (048) 626-1920

E-mail negainoie@r6.dion.ne.jp Hp <http://www.negainoie.com>



酷暑と災害が相次ぐ夏でした。友人知人の多くも被災され胸を痛める日々でしたが、無事の連絡が確認できるたびに安心していました。今も苦しんでいるみなさまのご無事を祈っております。

ねがいのいえは今年、大きな転換期を迎え、保育園、グループホームと次々に建設計画が進んでいます。4年がかりで取り組んできた農地の開発がようやく完了し、グループホームしあわせそう来春開所に向けて着工しました。また、その次に予定していたグループホームにぎやかさうの建設が突如先行することになり、9月に完成しました。こちらは11月開所です。

出会った人の生涯に寄り添うことを最初から決めていたねがいのいえの考えが実を結んだホームです。私たちは、全ての事業者と同じように考えていただきたいと思っています。

### 出会った人がやらなければならない

30年以上前、大学生の時にボランティア活動で障害のある方たちと出会い福祉の道に入った。ヘルパーもレスパイトサービスも存在しなかった時代に、北欧で始まったグループホームをモデルにして、親の会が都内にいち早く開設したホームを見学したことがある。軽度知的障害の女性4人がアパートで暮らす形だった。

なんと先進的なのだろう。自分にもいつかこんなことができるのだろうか、とてつもなく遠い道のりに感じた。あれから30年が経ち、多くの人の訴えと運動が実を結び、時代は変わった。少しの資金と勇気があれば、誰でも福祉サービスがやれる時代になり、困っている人が支えられる世の中になった。児童デイサービスも生活介護も急増した。私たちよりもはるかに速いスピードで事業を拡大し成長する団体もたくさんある。

しかしショートステイとグループホームに取り組む団体はまだ少ない。熱心な団体のみなさまに、その人の生涯を支えるつもりで出会って欲しいともう一度伝えたい。児童デイを充実させて目ざましい成長発達を促しても、家族が支えられなくなれば彼らはどこか知らないところへ去って行く。誰かが助けてくれるだろうという期待は望めない。それは出会った人がやる以外にない。

グループホームを開設してから入居者を募集する団体もあるが、重度な人には個別のカスタマイズや入居者の組み合わせも考えなければならない。できてから募集するホームは、はじめから軽度な人を対象にしているようで、やはり重度な人が取り残される。

重度障害の方と出会ったら、誰がいつどのホームで暮らすのか、ご家庭はあと何年介護できるのか、計画的に進めていく必要がある。そして本人も、ショートステイを月に1回から始めて、週に1回、2回と進めてゆき、やがて完全に家族から自立する日を迎えよう。自立への道は、事業者と家族と本人が気持ちをひとつにして進むものである。全ての団体のみなさまに繰り返し伝えたい。

### 助からなかった親子

7月、関西を襲った水害で助からなかった母と子の報道を見た。軽知的障害のある若い母は、支援者に支えられながらシングルマザーとして5才の子を育てていた。突如関西を襲った水害はまるで7年前の津波を再現するような光景だった。助けを求める連絡を受けて向かった支援者も、水に飲み込まれた街はずでにたどり着ける状態ではなく、母と子は命を落とした。

妊娠がわかった当初、知的障害のある女性が育てられるはずがないと周囲から反対があったのである。たったひとり親子を支援していた社会福祉法人の若き理事長は、なぜふたりを助けられなかったのかと自分を責めているようだった。高い理念と強い信念を持つ人が多い印象のある関西の福祉家たちの間でも、知的障害者の出産は難しいと思われたようである。福祉フォーラムでよく示される、当事者を囲む支援の輪のイメージが具現化されていなかったのみならず、想いを尊重するという基本に立っていなかった。以前、全国から福祉の先駆者を招いて学ぶ会をおこなっていた時に聴いた、南高愛隣会の話が胸によみがえった。



### 愛する人との暮らしを支える

障害のある人の地域生活を全国に先駆けて実現した長崎県雲仙の社会福祉法人南高愛隣会は、誰もが知るこの業界のトップランナーである。そこでは、グループホームは当たり前を通り越してすでに古い印象さえ受ける。同性だけで暮らすのは不自然で、愛し合う男女が一緒に暮らすのが当たり前、障害者同士の結婚も当事者が望めば、家庭生活から出産、育児まで支援する。

法人内に結婚相談所まであり、障害のある人の結婚をむしろ積極的に促す。このサポートを始めた時に、利用者の方たちが「もっと早くやって欲しかった」「一番望んでいたサービスだ」「今までの人生がもったいない」とおっしゃられたと言う。

#### 「愛する人との暮らしを支える」

たくさん先駆者を招いてお聴きした実践の中で、その言葉が一番心に残った。

親子を助けられなかった支援者たちは、同じ悲しみを繰り返さぬよう、振り返りと連携の構築にもう一度取り組み始めた。当事者を囲む支援の輪のイメージが本当に具現化するのは簡単なことではない。私たちもまだホームを開設することに追われている段階で偉そうに語ることはできないが、障害があっても愛する人と暮らすのは当たり前なのだというその理念を忘れなければ、やるべきことはおのずから浮かび上がってくるに違いない。



2018年11月開所予定 グループホームにぎやかそう（定員9人男性棟）



2019年4月開所予定 グループホームしあわせそう（グループホーム6人ショートステイ5人）

